
一般論文

いじめ現象における孤独感と自己矛盾に関する考察

A Consideration about the Feelings of Loneliness and Self-Contradiction in Bullying

作 田 誠一郎

Seiichiro SAKUTA

概 要

本論の目的は、いじめている生徒およびいじめられている生徒の対人意識の特徴を明らかにすることから、いじめ現象への対応とその課題について考察する。分析の結果、いじめている生徒は、能力主義的傾向が低く、自らを他者と比較することよりも個人の意見を推し進めるといいう指向が認められた。また、いじめている生徒は親しい人以外に関心が薄く、その親しい人に対しては本心を語れない傾向が明らかとなり、学校生活で孤独感を抱いていることが認められた。さらに、いじめている生徒のいじめられた経験について分析したところ、いじめられた経験を有する生徒はいじめられた経験のない生徒とくらべて、他者からの評価に対する気疲れや自己肯定感が低いことがわかった。特にいじめられた経験を有する女子生徒は、理想的な教員像として生徒の話聞き、悪いことを指導してくれる教員を求めている。この傾向は、同様に「いじめ4類型」における「矛盾型」にも認められた。つまり、いじめに関して対人意識的な矛盾を抱える生徒への生徒指導のひとつとして、生徒に寄り添いながらも悪いことをしっかりと正すことができる教員の指導力が重要であることが明らかとなった。そして、その前提としては、複眼的な視点からいじめを解明し、総合的ないじめ対策と環境づくりが必要であることを指摘した。

1. 問題の背景

学校社会において「いじめ現象」が社会問題化して久しい。日本におけるいじめは、1980年代から教育問題または社会問題として注目されて以降、根本的な解決策のないまま今日に至っている。特に2011年に起こった「大津市中2いじめ自殺事件」は、学校の対応を含めて多くの人びとの関心を集めた。この事件を受けて、2013年には「いじめ防止対策推進法」が成立し、重大ないじめに関して自治体や文部科学省への報告が義務づけられ、ネットいじめの対策も強化された。このようないじめに対して内藤（2010）は、いじめを「暴

力系のいじめ」と「コミュニケーション操作系のいじめ」に大別し、「暴力系のいじめ」に対しては、警察や弁護士への介入や活用を推奨している。また「コミュニケーション操作系のいじめ」は、「シカト」や嘲笑など警察や弁護士の介入が困難であり、被害者本人の意識に大きく依拠する点でその解決が難しいことを指摘している。

一方、いじめに対する重要な視点として、いじめ定義の変遷があげられる。文部科学省の1985年の定義では、「自分よりも弱い者に対して一方的に身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実を確認しているもの」とされていた。

近年では、同省の2006年の定義として「子どもが一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの、いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」としている。この変更の大きな理由としては、これまでのいじめの定義の「自分より弱い」「一方的」「継続的」「深刻な」といった限定的な言葉のために、実質的にはいじめと判断されるような内容であっても、形式的にこの定義によっていじめと扱われないケースがあるという批判を受けたことがあげられる。この定義の変更によって、その後の各学校から得られるいじめの実態調査の結果をみると、いじめの件数は大きく増加した¹⁾。潜在化していたいじめが定義や法律の制定によって顕在化することで、さまざまないじめの形態やそれに対応する教員や保護者の姿勢も今後問われることになるだろう。

本論では、高校生の対人意識からいじめの特徴を明らかにすることを目的とする。特にいじめの生徒の対人意識や対人関係を中心に明らかにすることで、いじめにかかわる生徒の現状について考察したい。

2. いじめに対する複眼的視点といじめの生徒の対人意識

いじめを構造的に分析した研究として、森田と清水（森田・清水1986＝1994）の「いじめ集団の四層構造モデル」をあげることができる。このモデルでは、「いじめる子」と「いじめられる子」の他に、直接手を下さないがいじめをはやし立てる「観衆」や知らないふりをするなど冷やかな反応を示す「傍観者」といった当事者以外の子どもの存在を明らかにした点で、いじめが学級という構造の中で生じていることを指摘した。また内藤（2001）は、戦中の日本における「中間集団全体主義」が学校および会社によって戦後も支えられてきたとして、いじめにおいてもこの中間集団全体主義に通底する学校共同体主義の教育政策が構造的にいじめ問題に関連していることを明らかにしている。

他方でいじめは、学校や家庭、地域といった社会環境を含めた構造的な問題であるとともに対人

関係の相互作用も含めたミクロな問題であるといえる。つまり、複眼的視点が用いられることによってその輪郭や内容が解明できるのではないだろうか。このようないじめに対して、いじめの当事者であるいじめの生徒といじめられる生徒、そしていじめを取り巻く生徒（観衆及び傍観者）というモデルを前提として、各生徒の意識に注目してみたい。特にいじめの生徒の対人意識や規範意識を知ることはいじめの解明の端緒であり、いじめ問題の対応においても重要な視点といえる。

3. 調査対象およびデータの概要

調査対象としては、2010年度に調査したX県内の全日制の公立高等学校および私立高等学校の中から8校を抽出し、2011年10月から12月にかけて1年生から3年生のすべての在学学生を対象に調査票を配布して記入してもらう集合調査法を用いた。全体のサンプル数は5,240である。また男女比は、女性2,452（46.8%）、男性2,788（53.2%）である。

4. 分析

4.1 数量化三類からみたいじめの特徴

対人関係の全体的な傾向をみるために数量化三類を用いた分類による得点平均の比較をおこなった。分類に用いた調査項目は、個人化傾向等を掴むための自らの性格を問う項目、対人意識を知るための友達関係に関する項目を用いた。それぞれ使用した質問項目は、「一人の方が好き」の「思う」のみ（1「そう思う」、2「どちらかといえばそう思う」を統合した。以下同様）、「他人の目が気になる」「他人への同情はバカをみる」「他人に寛容であることは大切」「能力がない人に冷たい」「他人と同じくらいできる」「人の意見で決心を変える」「自らの行動を振り返り改善する」「親しい人以外に関心がない」「人から認められないと不安」「数少ない人と長く付き合う」「安心して話せる友だちがいない」「一人でいると寂しい」「『場の空気』が読めることは重要である」「親友の悪い行動は注意する」「性格や意見の合わない人とはつきあわない」「約束を破っても気にならない」「浮くことに対して不安」「他人から何を言われても気にならない」「自分の行動や結果はすべて責任

表1 各軸の固有値、寄与率、相関係数

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.1295	14.56%	14.56%	0.3599
第2軸	0.0893	10.05%	24.61%	0.2989
第3軸	0.0770	8.66%	33.27%	0.2776
第4軸	0.0664	7.47%	40.74%	0.2577

を持つべき」の以上である。

各軸の固有値、寄与率、相関係数を表1に示した。

各軸の傾向は、図1から図4のとおりである。

第1軸は個人主義的な傾向を示す軸である。第2軸は他人指向的でかつ不安感を伴う傾向を示す軸である。また第3軸は約束を反故にする傾向を示しており、背約的な傾向を示す軸である。最後に

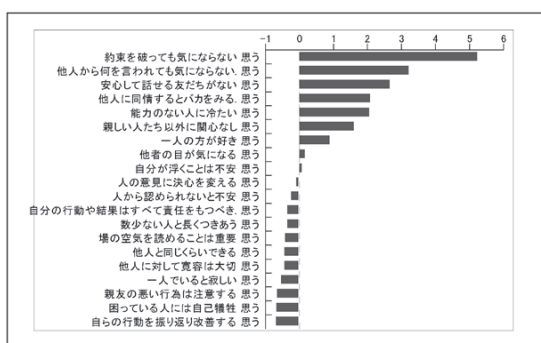


図1 第1軸（個人主義的傾向）

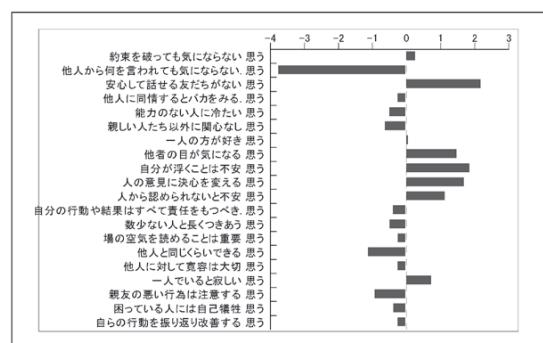


図2 第2軸（他人指向的不安傾向）

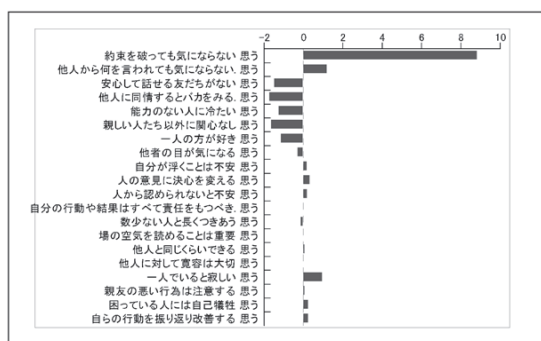


図3 第3軸（背約的傾向）

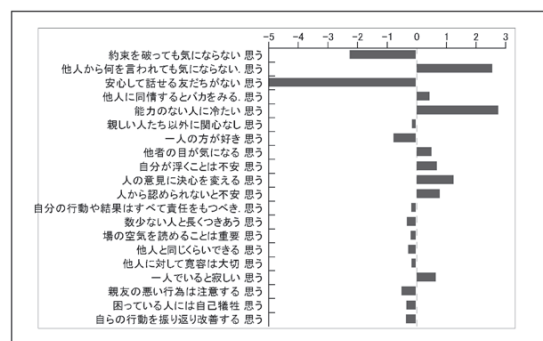


図4 第4軸（能力主義的傾向）

第4軸は能力主義的な傾向を示す軸である。

この4つの軸といじめ行為（「現在、クラスや部活等でいじめている」「現在、クラスや部活等でいじめられている」）のサンプル得点の平均をみたと図5の結果が得られた。

図5の結果をみると、いじめている生徒の第2軸（他人指向的不安傾向）および第4軸（能力主義的傾向）の平均得点が、いじめていない生徒およびいじめられていない生徒とくらべて低く、第

1軸（個人主義的傾向）および第3軸（背約的傾向）の平均得点が「いじめている」群内で他の2軸にくらべて高いことが特徴としてあげられる。

すなわち、自らを他者と比較することよりも個人の意見を推し進めるという指向が読み取れる。それに対していじめられている生徒は、いじめていない生徒およびいじめられていない生徒の平均得点とくらべて4つの軸がほぼ同じ得点となっている。いじめられている状況下において、対人意

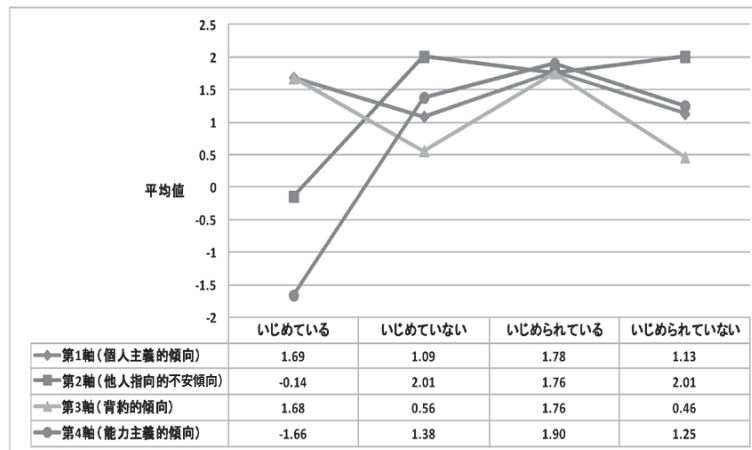


図5 いじめ行為とサンプル得点の平均値

識としての特徴が薄れていることが認められる。

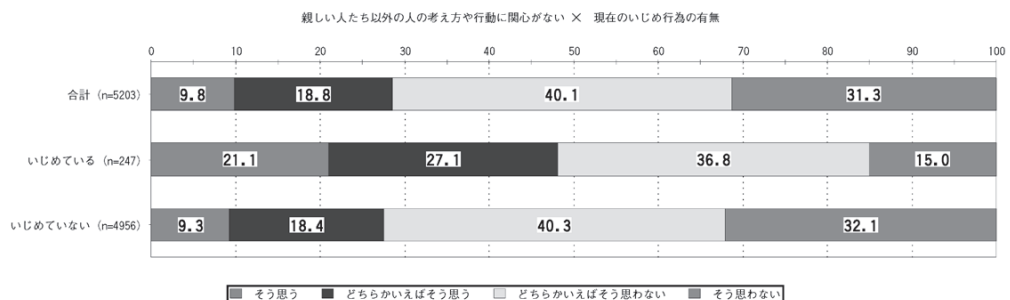
数量化三類の分類から得られた4つの軸をみても、現代の高校生が抱える対人意識や価値観の一端があらわれているようである。グローバル化への対応や新自由主義的価値観（自由競争や能力主義など）の浸透等、若者を取り巻く社会状況は激しく流動化する傾向にある。特にリーマンショック以降、政治や経済の混迷は若者の将来像に大きく影響し、常に周りをモニタリングしながら自己を環境に合わせていく能力（即戦力）が若者に求められる傾向にある。

このような社会的な状況を踏まえると、各軸の特徴においても個人主義的な傾向が本調査の高校生の人間関係にも顕著にあらわれている。一方で、周囲の意見に合わせていくことから生じる不安（他者からの評価に対する不安）や背約的な傾向などの人間関係の忌避と受け取れる傾向も認め

られることから、若者の矛盾に満ちた対人意識の傾向が読み取れる。

4.2 いじめの行為といじめられた経験の有無

いじめは、いじめる者が他者に対していじめ（いじめられた者の主観的ないじめ）をおこなうことから始まるといえる。つまり、いじめる者の対人意識やその特徴を知ることは、いじめを解明する端緒となるのではないだろうか。本考察では、いじめている生徒の対人意識とともに過去のいじめられた経験との関係について分析を進めてみたい。はじめに、いじめている生徒の特徴をいじめていない生徒と比較してみていきたい²⁾。図6は「親しい人たち以外の人の考え方や行動に対する関心がない」という設問を用意し、その結果をいじめている生徒およびいじめていない生徒のそれぞれであらわしたものである。



$$\chi^2 (df=3, N=5207) = 65.6351 \quad p = .000$$

図6 島宇宙的傾向

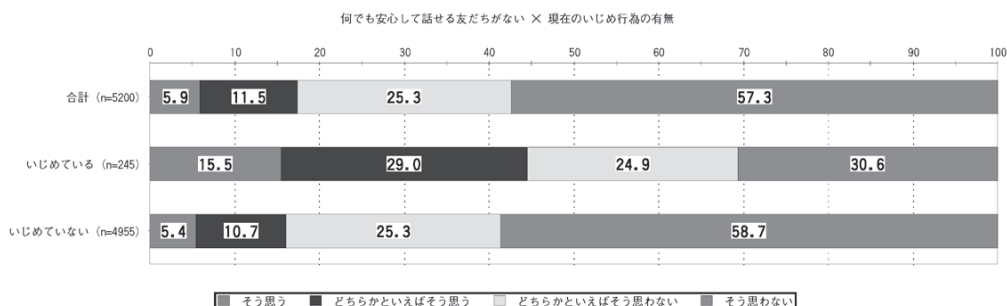
この結果からいじめている生徒はいじめていない生徒とくらべて、自らの交友関係の深い範囲以外にはあまり関心を示していないことがわかる。

しかし、次の「なんでも安心して話せる友だちがい」の設問から得られた図7の結果を見ると、半数近くのいじめている生徒が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答しており、「親友」と呼ばれるような親密な友人関係が意識

の上では築かれていないことがわかる。

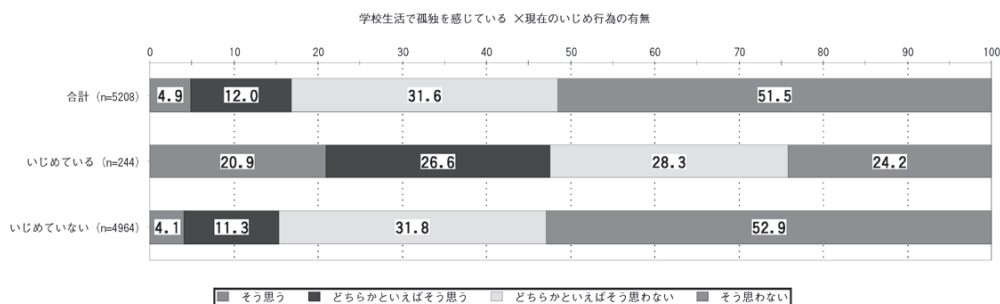
また学校生活においていじめられている生徒の対人意識をみると、図8でも明かなようにいじめている生徒の約5割が孤独感を抱えていることがわかる。

さらに、いじめている生徒の特徴をみるために、「これまでいじめられた経験はありますか」という設問を用意して、いじめられた経験の有無を性



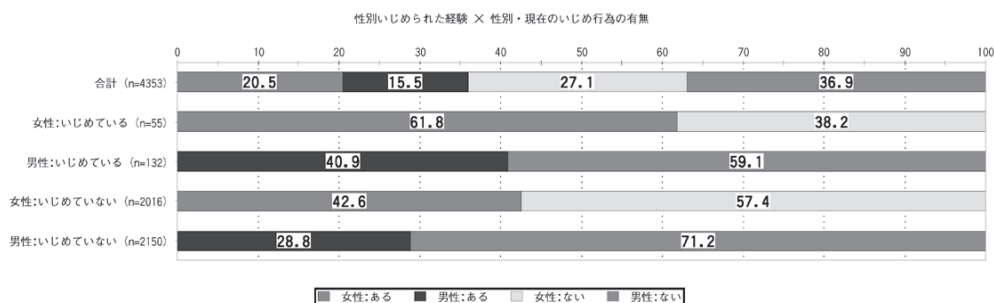
$$\chi^2 (df=3, N=5200) = 140.8822 \quad p=.000$$

図7 親密的関係の途絶傾向



$$\chi^2 (df=3, N=5208) = 219.6229 \quad p=.000$$

図8 学校生活における孤独的傾向



$$\chi^2 (df=9, N=4353) = 4386.5414 \quad p=.000$$

図9 性別によるいじめ行為およびいじめられた経験の有無

別でみた結果が図9である。

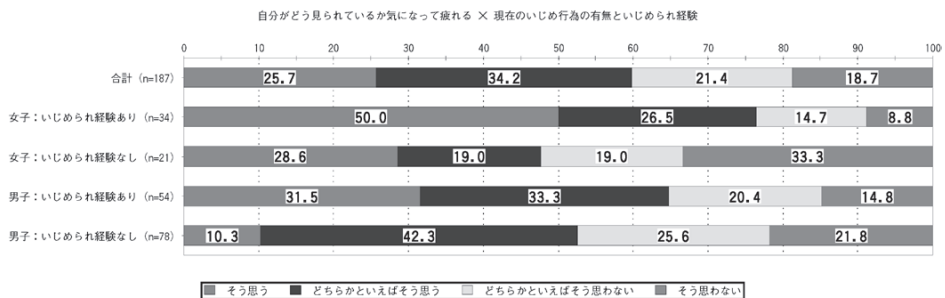
図9からわかるように、いじめている女子生徒は61.8%、そしていじめている男子生徒は40.9%がそれぞれいじめられた経験を有している。つまり、このいじめている生徒のなかで半数近い生徒がいじめられた経験を有しているという事実は、いじめの内容の違いはあるだろうがいじめの辛さや苦しさを実感した生徒が、そのいじめの辛さや苦しさを新たにいじめられている生徒に向けているとも言い換えられる。このようないじめられた経験を有する生徒の対人意識は、どのような特徴を有しているのだろうか。

次に、いじめている生徒を対象を絞っていじめ経験の有無を性別でカテゴリー化し、その対人意識の特徴をみてみたい。図10は「人とつきあうとき自分がどうみられているか気になって疲れる」という設問に対する回答結果である。

この結果から、男女ともにいじめられた経験を有している生徒において他者からの評価を気にする傾向が強いことがわかる。特にいじめられた経験がある女子生徒においては、76.5%が「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答している。

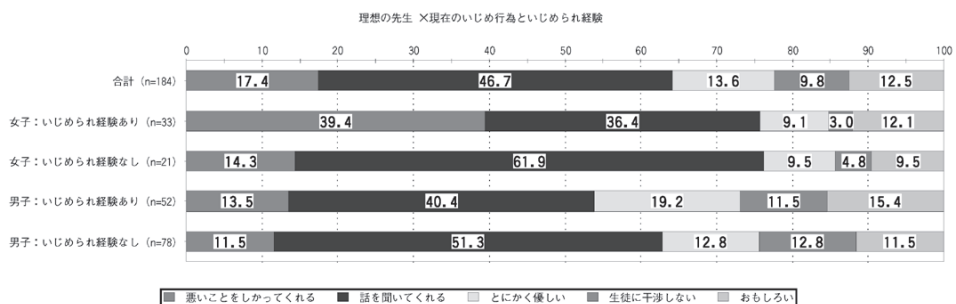
次にいじめている生徒の理想の教員像について設問を用意し、その結果を図11に示した。

図11から、全体ではいじめている生徒の理想的な教員像として「話を聞いてくれる」が46.7%であり、次に「悪いことをしかってくれる」が17.4%を占めている。特にいじめられた経験のある女子生徒に関しては、約4割が「悪いことをしかってくれる」教員を求めている。つまり、この結果から、話しをしっかりと聞き、悪いことを正すことができる教員がいじめに対する教員の姿勢として重要であることを知ることができる。



$$\chi^2 (df=9, N=187) = 25.8103 \quad p = .002$$

図10 いじめられた経験の有無と他者の評価



$$\chi^2 (df=9, N=184) = 19.422 \quad p = .007$$

図11 いじめている生徒の理想的な教員像

4.3 いじめ4類型と「いじめ規範」の特徴

図12は、「青少年(中・高生)のいじめに対して、あなたはその行為を許せますか」という設問に対する「いじめは本人の自由だ」および「いじめは許せない」の回答と、「現在、クラスや部活等でいじめている」という設問に対する「いじめている」および「いじめていない」の回答を用いて4つに類型化したものである。

それぞれの類型化した結果をいじめ意識としてそれぞれ「矛盾型」「否定型」「観衆型」「責任回避型」と名付けた。「矛盾型」(3.0%)は、いじめを許せないと意識しているが自らはその規範を破っているタイプである。「否定型」(79.6%)はいじめを許せないと意識しており、かつ現在いじめをしていないタイプである。「観衆型」(15.8%)は、特徴としていじめを自らはおこなっていないが他者のいじめに対しては寛容である。つまり、他者の

いじめに対して許容するタイプである。最後のタイプは「責任回避型」(1.6%)である。このタイプは、自らのいじめに対する意識は低く、またそのいじめに対して寛容である。つまり、いじめることに対して躊躇がなく、そのいじめに対して責任を回避するタイプである。

このいじめ4類型を用いていじめの規範意識と対人意識についてみてみたい。図13は、他者への同情に関する無機的な対人傾向をみたものである。

結果として、否定型とくらべてその他のタイプが高い傾向にある。いじめている責任回避型や矛盾型およびいじめを許容する観衆型の生徒にみられる他者に対する無機的な対人意識は、言い換えれば、いじめを抑止する共感や同情という感情が全体的に低いことをあらわしている。

次に「他人から何を言われても気にならない」という設問を用意して対人関係における無関心の

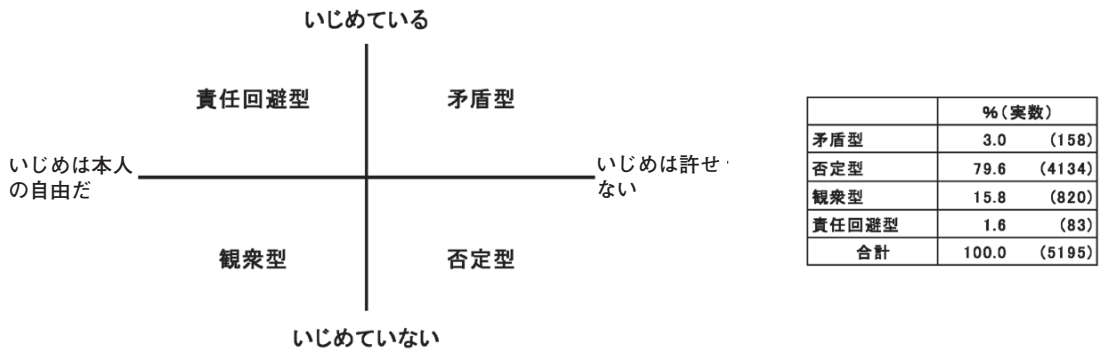
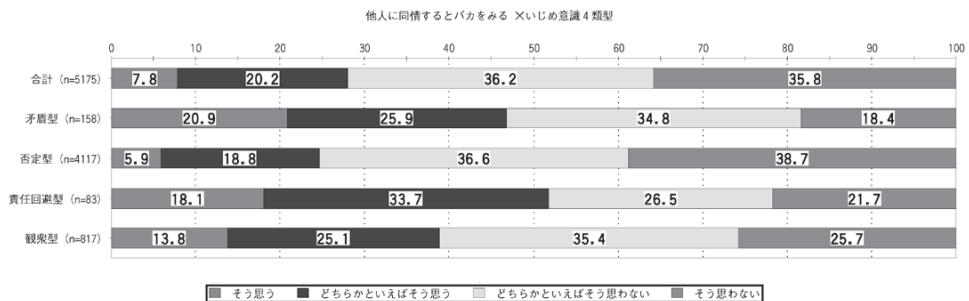
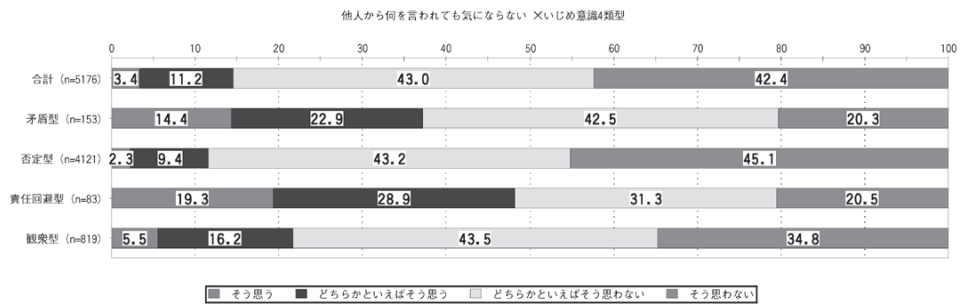


図12 4つのいじめ意識のカテゴリー (いじめ4類型)



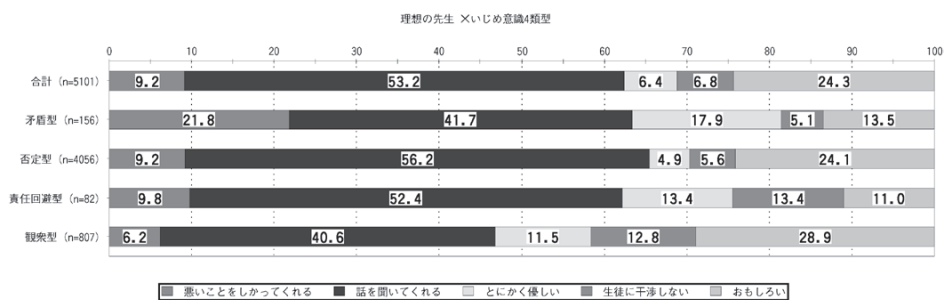
$$\chi^2 (df=9, N=5174) = 180.8478 \quad p=.000$$

図13 無機的な対人傾向



$$\chi^2 (df=9, N=5176) = 1263.0333 \quad p = .000$$

図14 対人無関心傾向



$$\chi^2 (df=12, N=5101) = 232.9861 \quad p = .000$$

図15 いじめ4類型における理想的な教員像

傾向をみると図14の結果が得られた。

図14からもわかるように、矛盾型や責任回避型のように実際にいじめている生徒において、他者からの意見に対する無関心の傾向が強いことがわかる。先述したが、いじめている生徒に学校社会における孤独感や本心が語れない傾向が認められた。親密な関係性を重視しながらも孤独で不安な意識を有し、他者の意見に関しても無関心な傾向は、いじめられている生徒の孤独感と通底するのかもしれない。

最後にいじめ4類型における理想的な教員像について回答してもらい、その結果を図15に示した。

図15から、全体的に話を聞いてくれる教員を求めていることがわかる。特に矛盾型に関しては、先述したいじめられた経験のあるいじめている女子生徒と同様に「悪いことをしかってくれる」教員を21.8%の生徒が理想の教員像としてあげている³⁾。これらは、いじめに対して矛盾した意識を

有する生徒への指導の方向性を示唆する結果ともいえる。

5. 結論と今後の課題

本調査の結果から、高校生の対人意識のなかに個人主義的で能力主義的な傾向が存在し、他者の評価を気にする傾向が見出された。いじめている生徒に注目すると、個人主義的な傾向がいじめていない生徒およびいじめられていない生徒とくらべて強くあらわれていた。また、いじめている生徒は、親しい人以外に関心が薄く、その親しい人に対しては本心を語れない傾向が明らかとなった。そのため、学校生活で孤独感を抱いていることも認められた。

また、いじめている生徒の特徴を解明するためにいじめられた経験の有無に着目したが、いじめられた経験を有する生徒はいじめられた経験のない生徒とくらべて、他者の評価に対する気疲れや

自己肯定感が低いことがわかった。特にいじめられた経験のあるいじめている女子生徒は、理想的な教員像として、生徒の話を聞き、悪いことを指導してくれる教員を求めている。すなわち、教員のいじめに対する生徒指導のひとつとして、生徒に寄り添いながら悪いことをしっかりと正すことができる指導力が求められていることもこの結果から知ることができる。

さらにいじめ4類型における対人意識では、矛盾型および責任回避型に分類される実際にいじめている生徒が4.6%も認められ、いじめ行為を許容する傾向にある観衆型が全体の15.8%を占めていることがわかった。つまりこの数値は、約2割の生徒がいじめ行為をおこない、またいじめを許容していることを示している。さらに観衆型は先述した「いじめ集団の四層構造モデル」に置き換えればいじめを許容する傾向にあり、かついじめを増幅させるようないじめる側に近い存在ともいえる。このいじめの構造的な問題に対する具体的な対応はあるのだろうか。

1980年代の「いじめ」という言葉が一般化して以来、約30年が経つが、「いじめ」という言葉が定着する以前は、実際に校内暴力や部活内の制裁等のかたちで実態としてはおこなわれていたと思われる。大人の社会においても「パワハラ」や「セクハラ」等、ハラスメントとしての「いじめ」が問題視されており、「いじめ」が普遍的な現象であることがわかる。つまり、学校社会においても「いじめは起こる」を前提とした対策を講じることによって、自殺に至るような深刻ないじめの被害を抑止することが可能ではないだろうか。しかし、本調査結果からいじめている生徒だけを学校から排除することは長期的ないじめ対策とはならないと思われる。いじめている生徒も人一倍、対人意識において孤独感や不信感を持っている。そのためには、複眼的な視点をいながら総合的ないじめ対策と環境づくりが必要である。

例えば、これまでのように担任だけの個別対応や生徒指導主事の職人芸のような指導だけでは、今後の潜在化し細分化する傾向にある「ネットいじめ」等に対応することは難しい。また教員と生徒の相性や時間的な拘束も含めて考えると組織的ないじめ対策が必要であろう。さらに付言すれば、

教員のいじめを感じとるアンテナは、初期的ないじめの発見に際して重要な契機となる。そして、いじめ被害者の早期発見とともにいじめは、教員の関わりがいじめ抑止に大きな影響を与えるものと考えられる。特に生徒の対人意識に認められた他者からの承認と不安は、いじめと強いかわりをもっていると思われる。今後、生徒が他者を受容し、自己を承認してもらえようなかかわりを意図的に教員や保護者がつくることも、総合的ないじめ対策のひとつとして必要であろう。

注

- 1) 文部科学省が全国の小中高校及び特別支援学校における問題行動調査において198,108件のいじめを確認したと報道された(『朝日新聞』2013.12.11朝刊)。この数値自体は過去最多であるが、これまで潜在化していたいじめが学校側から把握されはじめた結果とも受け取れる。
- 2) 「いじめている生徒」は、「現在、クラスや部活等でいじめている」の設問に対して、「そう思う」1.7%(77名)および「どちらかといえばそう思う」3.3%(172名)をあわせた値であり、一方の「いじめていない生徒」は、「どちらかといえばそう思わない」8.9%(464名)および「そう思わない」86.4%(4,513名)をあわせた値であらわしている。
- 3) 「矛盾型」におけるいじめられた経験は、50.4%(62名)であった。

引用・参考文献

- 荻上チキ, 2007, 『ネットいじめ』PHP 研究所
 共同通信大阪社会部, 2013, 『大津中2 いじめ自殺—学校はなぜ目を背けたのか』PHP 研究所
 加野芳正, 2011, 『なぜ、人は平気で「いじめ」をするのか?—透明な暴力と向き合うために』日本図書センター
 鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』光文社
 竹川郁雄, 2006, 『いじめ現象の再検討—日常社会規範と集団の視点』法律文化社
 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
 内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』柏書房
 内藤朝雄・荻上チキ, 2010, 『いじめの直し方』朝日

新聞出版

本田由紀, 2011, 『若者の気分—学校の「空気」』 岩波書店

森口朗, 2007, 『いじめの構造』 新潮社

森田洋司・清永賢二, 1994, 『いじめ—教室の病』 (新訂版) 金子書房

森田洋司, 1999, 「『現代型』問題行動としての『いじめ』とその制御」『講座社会学逸脱』 東京大学出版会

森田洋司, 2010, 『いじめとは何か—教室の問題, 社会の問題』 中央公論新社